

脳振とう 正しく理解を 福井でシンポ 運動中の対応 題材



スポーツ中の脳振とうの対応について考えたシンポジウム＝22日、福井市の福井大文京キャンパス

スポーツ中の脳振とうの対応をテーマにしたシンポジウム(福井新聞社後援)が22日、福井市の福井大文京キャンパスで開かれた。県内の救急医師や大学教授らが講演。脳振とう

を脳損傷の一つとして正しく理解し、指導者や選手に対処法を教育する重要性を訴えた。スポーツ中の事故や、仲裁など法的な問題について幅広く研究する日本スポーツ法学

会が主催。同学会会長で奈良女子大の井上洋一教授ら会員の大学教授や弁護士のほか、県内のスポーツ関係者ら計約100人が参加した。

福井大医学部附属病院救急部長の木村哲也診療教授が基調講演し、脳振とうは頭痛などの症状が一過性の場合、軽視されたり、見逃されたりする場合があると指摘。初期対応として「首の痛みや物が二重に見えるなどの症状があれば、救急車で搬送するべきだ」と話した。

ディスプレイでは同大教育学部の水沢利栄教授が事例を報告した。スキー授業で学生が転倒し、強度の脳振とうと診断されたことをきっかけに海外での対策を研究。頭部に衝撃を受けてから24時間

は、2時間ごとに体の状態を確認するといった注意喚起文書を作ったことを紹介し「素人判断で対処してはならない。頭部外傷や脳振とうの教育を広げるべきだ」と呼び掛けた。
(石井敬夫)